

昨年から嵐剤を含む薬剤は使用禁止となっています

一昨年、嵐剤に耐性のあるいもち病菌の発生が確認されたため、秋田県の防除基準でも嵐剤を含む薬剤は使用禁止となりました。今年も育苗期防除に特に重点を置き、いもち病菌を本田に持ち込ませないようにしましょう。

苗いもち防除と箱処理剤を組み合わせて葉いもちの発生を抑えましょう

苗いもち防除

※どちらかを必ず実施

ベンレート水和剤	
500倍液	500ml/箱
播種時～播種7日後までに使用	



ビームゾル	
500倍液	500ml/箱
緑化始期（ベタ張り除去後）に使用	

箱処理剤

※いずれかを
使用

床土混和～播種時	床土混和～移植当日	緑化期～移植当日	移植3日前～移植当日
ファーストオリゼフェルテラ粒剤	ルーチンアドスピノ箱粒剤	Dr.オリゼフェルテラ粒剤	Dr.オリゼフェルテラグレートM粒剤
	ツインターボ箱粒剤		デジタルメガフレア箱粒剤
	ルーチンパンチ箱粒剤		

※水稲育苗後に園芸作物を栽培する場合は、育苗ハウス内並びに床土混和において上記農業を使用しない（ベンレート除く）。また育苗ハウス全面に無孔不透水性シートを必ず敷く

苗立枯病予防

使用時期	農薬名	成分数	使用量、希釈倍率	散布量（箱当たり）
床土混和	タチガレエースM粉剤	2	6～8g/箱	-
	オラクル粉剤	1	10～15g/箱	
播種時	タチガレエースM液剤	2	1000倍	500ml
			2000倍	1000ml
	オラクル顆粒水和剤	1	4000倍	500ml
			8000倍	1000ml
播種後	タチガレエースM液剤	2	500倍	500ml
			1000倍	
	ランマンフロアブル	1	1000倍	

被覆シートは天候に合わせて使用しましょう

無加温出芽（ベタ置き）は天候に合わせて使用する保温資材を選びましょう。使用する資材を間違っていると出芽不良や苗ヤケの原因となりますので注意が必要です。

出芽するまでは被覆シートと苗箱の間に温度計を入れ床土温度を管理しましょう。

被覆シートの特徴と注意点

資材名	効果	特徴及び注意点	資材の写真
ミラシート (白スポンジ系)	保温、保湿	適度な厚みがあり、保温効果に優れることから、低温が予想される場合は効果が高い。反対に好天が続く場合は床土温度が急激に上昇しやすいため苗ヤケの発生に注意が必要。	
シルバーポリトウ (ポリ+アルミ複合)	保温、保湿、遮光	表面のアルミにより遮熱効果があり床土の高温防止に役立つ。低温時にも保温効果が期待できる。被覆する際には裏表を確認する。床土温度にも注意を払う。	
太陽シート (反射系)	保温、保湿、遮熱	高温時における急激な温度上昇を防ぎ、苗ヤケ等の高温障害を防止する。低温時は床土温度が上がりやすく出芽日数がかかりやすいので床土温度を上げる工夫が必要。	
ラブシート (不織布)	保温、通気、通水	単独で使用すると乾燥しやすい。他シートと組み合わせて使用する場合は、ラブシートは下に敷き、その上に他シートを被覆する。	

平成29年3月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／仙北農業共済組合
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



良い稲作りは健康で丈夫な苗作りから始まります

今冬は、例年並の積雪となり、昨年より雪解けは遅くなる見込みです。近年の春作業期間中は高温になることが多く、昨年も高温による苗ヤケやもみ枯れ細菌病の発生が見られました。活着の良い稲を作るためには健康で丈夫な苗を作ることから始まります。これから本格的な春作業に向けて病害虫を出さない管理に努めましょう。

まずは作業場内の環境衛生から

作業場内にある稲わら・籾殻・粉じん等には、いもち病やばか苗等の病原菌が付着していることがあり感染源になります。作業に取りかかる前に清掃を行い、作業場内の環境衛生をととのえましょう。

- ① 配布された種子は清潔なパレット等の上に置き、床に直接置くことをさげましょう。
- ② 品種や消毒方法の違う種子を一緒に置かないようにしましょう。
- ③ 種子予措、育苗作業に使用する器具や容器は使用する前に洗浄し、汚れなどを落としましょう。また、前年度ばか苗病やもみ枯細菌病に悩まされた方は病原菌が付着している可能性がありますので、洗浄と同時に器具の消毒を行きましょう。（消毒資材：イチバン500～1,000倍で使用）
- ④ 浸種に使う水は水道水か井戸水を使用しましょう。
- ⑤ 複数の品種や消毒方法の違う種子を同じ容器で一緒に浸種や催芽は行わないよう注意しましょう。
- ⑥ 周辺からの病原菌の侵入を防ぐ為、浸種、催芽時は容器にフタをしましょう。
- ⑦ 浸種、催芽で使用する器具や容器は品種や消毒方法が変わるごとに十分に洗浄しましょう。



なんといつでも
安心が一番!

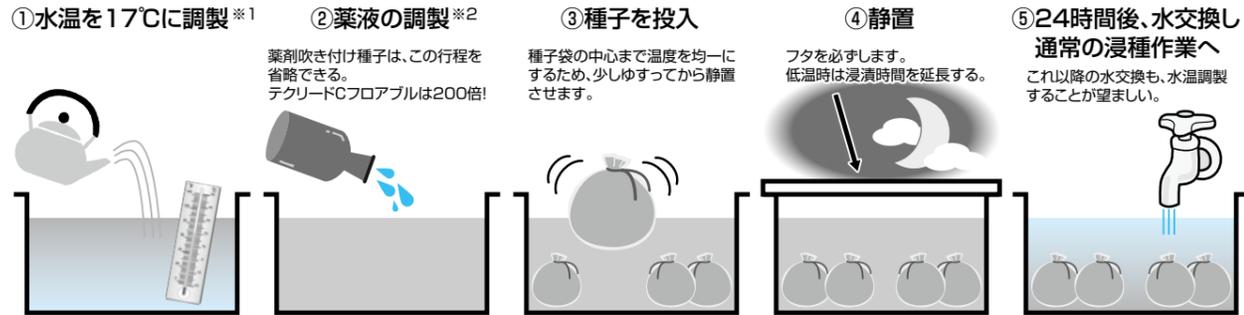
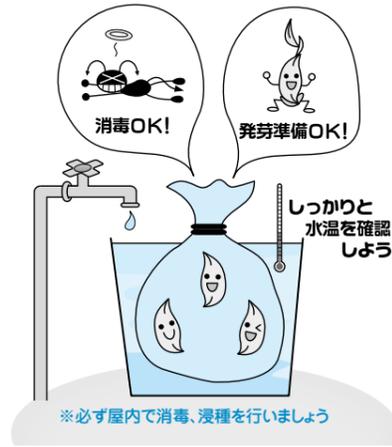
例) 3間×10間 (30坪) の水稻育苗ハウス (新品)
補償金額 **178,000円**
掛金はわずか **1,031円** (2ヶ月)

※詳しくはNOSAI仙北まで TEL 0187-63-1066

浸種と催芽は温度に注意しましょう

薬剤を効かせるために

薬剤吹付種子は水に漬けて溶け出した薬剤を種粉が吸収することで初めて消毒効果が出ます。水温が10℃以下の場合には薬剤の効果が低下しますので、浸種時の水温は10～15℃を目安に行いましょう。はじめにお湯を使い水温を17℃程度にしてから浸種を始めると薬剤の効果が安定します。浸種後袋をゆすって、薬液が全体にいきわたるようにしましょう。



※1 種子を投入した際に水温が適温まで下がることを狙って、最初に少し高めの水温に調整します。
 ※2 ヘルシード剤、テクリード剤ともに浸種水温10℃以下では薬剤効果が不十分になったり生育抑制につながる場合があります。

水の量は種子1kgに対し水3.5ℓ程とし、浸種開始から2日間は水の交換は行わず、一回目の水交換後、2～3日おきに水の交換を行いましょう。浸種期間は浸種水温10℃の場合で6～10日程度とし、水交換時には必ず粉の状態を確認し、粉袋を上下入れ替えるなどして均等に吸水させるようにします。

浸種時にしっかりと粉に吸水させてやることで、そろった芽出しにつながります。十分に吸水をした粉は胚が白く透けて見えるようになり、浸種終了の目安となります。

無消毒種子を消毒する場合は効果の高いテクリードCフロアブルを使用しましょう。薬液量は種子1kgに対し、薬液2ℓ程度とし、水温を必ず17℃程度にしてから種粉をつけるようにしてください。

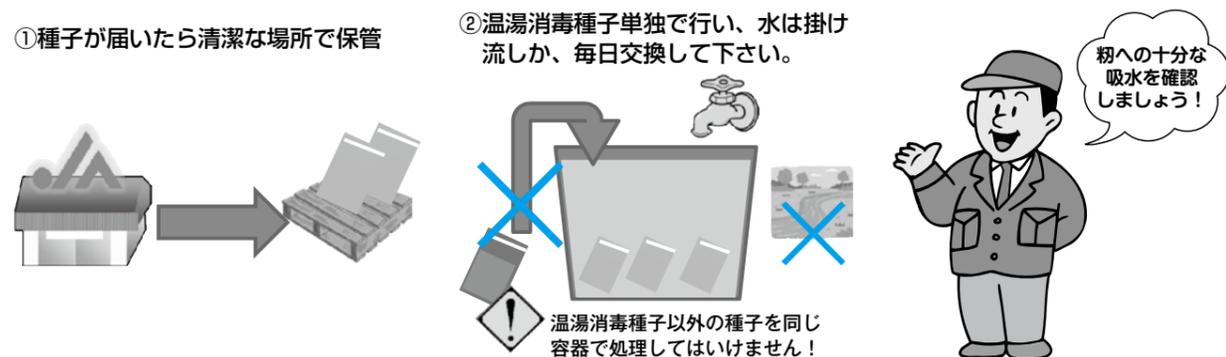
温湯消毒種子の注意点

温湯消毒種子はお湯により殺菌が終了した無菌状態の種子なので、浸種後も清潔な環境に保つことが重要です。

河川水などは雑菌等がいるため、浸種、催芽に使用する水は水道水か井戸水を使い、水の量は種子量の2倍以上で行いましょう。消毒方法が違う種子と同じ容器で浸種しないでください。

呼吸活動が活発なため、水は常時掛け流しか毎日交換し、水循環は病原菌の増殖を助長させるため絶対に行わないでください。また、浸種水温は10～15℃の範囲で行いましょう。

芽の動きが早い傾向にあるため粉をよく確認しましょう。

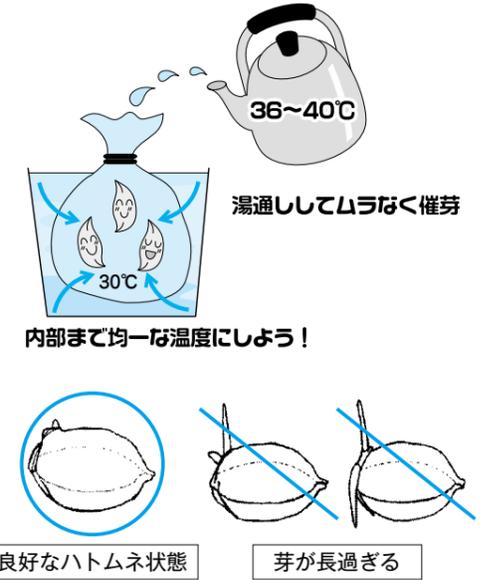


催芽はていねいに行いましょう

催芽時には36～40℃のお湯で湯通しを行い、種子袋の内部まで均一な温度になるようにしましょう。その後、水温30℃で催芽を行います。水温が32℃を超えともみ枯細菌病などの病気にかかる危険性が高まりますので必ず水温は確認しましょう。

温湯消毒種子を使用する場合は、催芽時にタフブロック剤を使用し防除効果を高めましょう。

芽の長さはハト胸程度を目安とします。催芽時に芽を伸ばしすぎると播種作業などで損傷が多くなり、播種量のばらつきや播きムラ、苗ぞろいが不均一になる原因となりますので注意しましょう。



プール育苗に取り組み始める方へ

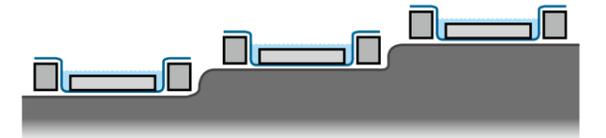
プール育苗は育苗ハウスにビニールシートなどでプールを作り、苗が緑化期後1葉以上に生長したらプールに水を入れて管理する育苗方法です。プール育苗を行うことにより水管理や温度管理作業が大幅に軽減されるので、日中の管理が難しい方などにオススメです。また、もみ枯細菌病や苗立枯細菌病の発病を抑制することができ健苗育成に役立ちます。

準備

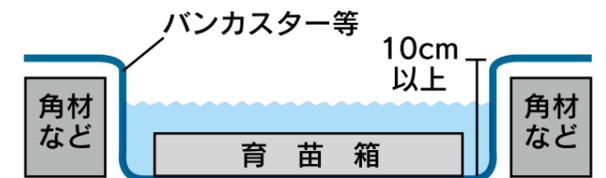
プール育苗を行うハウス内をできるだけ水平にして足跡がつかないように鎮圧しましょう。育苗ハウスの傾斜が大きい場合はプールを数段に区切るなどして置き床を水平にしましょう。

置き床の幅は育苗箱を並べる幅より5～10cm程度広くし、周囲は土や角材等で8～10cm程度高くし枠としましょう。プールには水の漏れないビニール（ブルーシート、バンカスター等）を使用します。

根が伸びやすいため育苗箱の下に敷き紙をしき、根が貫通しないようにしましょう。また、プール内に育苗箱を並べる際は、発泡スチロール等の上に乗りながら作業をするなどしてビニールを傷つけないように注意しましょう。



●育苗ハウス内全体を水平に出来ない場合はハウスを細かく区切りながら敷物に合わせた水平な置き場を作ります。(例: 1.5間～2間×3間の穴の開いていないビニールシートを準備しその部分を水平にする)。



●ハウス内をできるだけ水平にならした後に、ビニールシート（バンカスター可）を敷き、育苗箱の周囲を土または角材等で押さえてプールを作ります。高さは10cm以上が理想。

ほ場の準備をしましょう

昨年の作業の影響により田面に凸凹のあるほ場では、雪解け時に高低差を確認し田面を均平にしましょう。雪が残っているところは高くなっているため切土します。また、水が溜まっている所は低くなっているため盛土しましょう。

ほ場の高低差を少なくすると耕起や代かきが均一になります。田面が均一になることで肥料の効果が安定し生育が均一になります。また、除草剤の効果が安定し、雑草を抑えることができ、養分競合や斑点米カメムシ類の被害を抑えることにつながります。